第 3 回川崎市史市制 100 周年記念版編集懇談会 会議録（摘録）

- 1 日 時 令和 7 年 3 月 6 日（木）午後 7 時～午後 9 時
- 2 場 所 川崎市役所本庁舎 7 階 総務企画局会議室 5
- 3 出席者
  - (1) 委 員 阿久津委員、大城委員、大島委員、落合委員、嶋田委員、鈴木（ひ）委員、鈴木（勇）委員、反町委員、高田委員、竹内委員、中村委員、にしにし家委員、羽賀委員、福森委員（オンライン参加）、望月委員
  - (2) 事 務 局 総務企画局コンプライアンス推進・行政情報管理部：小野部長
総務企画局公文書館：相原館長、堀切担当係長
TOPPAN 株式会社：浅井、大高、鶴岡
株式会社トップノック：片岡
市政だよりライター：早川
株式会社アーク・コミュニケーションズ：渡部
- 4 視 察 川崎市長 福田紀彦
- 5 次 第
  - (1) 開会／趣旨説明
  - (2) 構成案（初版）についての意見交換
  - (3) 情報発信についての意見交換
  - (4) 次回への議題提示
  - (5) 総括／次回案内
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴者 1 名

（次第一 1） 開会・趣旨説明

相原館長

皆さま、本日はお忙しいところ、川崎市史市制 100 周年記念版第 3 回編集懇談会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。開催にあたりまして、本日の会の趣旨をお伝えさせていただきます。

前回の懇談会では、構成案に何を載せたら良いかといった視点で多くのアイデアやご意見をいただきましたけれども、それを踏まえた案を改めて事務局で今回用意をさせていただいております。今回は、前回とはまた別の視点で、主にターゲットとなる世代に本当に興味を持って読んでもらえるかといった客観的な視点から、改めて構成案にご意見やアドバイスをいただくことで進めさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、本日は懇談会での委員の皆さまのお話を直接お聞きになるため、福田市長にご臨席いただいております。

まず、福田市長からご挨拶をいただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

福田市長

皆さん、改めまして、こんばんは。平日のこの時間からですね、大切な皆さんのお時間をいただき、本当にありがとうございます。

昨年の秋からもう会議を始めていただいて、思い返せばこの懇談会の皆さんの人選のところから、私、ああでもないこうでもないって言っておりまして、こういう方たちが集まれば間違いなく面白いものができると思っていたのです。事前に構成案について資料を見させていただき、本当に面白いものができるなということで、今からワクワクしております。様々なバックラウンド、あるいはタレントを持った方たちがこうやって集まるとこういうことになるのだなど、すごく嬉しいなと思っております。

市史って言うと、ずらっと並んだ辞書のような分厚いのがいくつも並ぶという風なことで、あれはあれですごく意義のあるものですけど、それとは違った形で、やっぱり市民の皆さんに川崎市のことを改めて知ってもらって、関わってもらって好きになっていく、この市制100周年のテーマというか、そういったものができる、よりやっぱり川崎のことを本当に心から好きになってもらえるんじゃないかなと思っております。

おかげ様で、100周年は昨年来いろんな取り組みやってきましたので、「都市イメージ調査」という毎回同じ質問を繰り返している調査があるのですが、居住推奨度とか、あるいは「川崎は良いとこだ」と思う人たちが爆上がりしていて、それは、知って関わってもらったからっていうことにほかならないというふうに思います。

ですから、改めて皆さんが作っていただく市史を読んで、子どもたちをはじ

め、全ての世代の人たちが、川崎って良いなと魅力を再発見していただくような、そんなものに作り上げていきたいなと思っておりますので、引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ちょっと1時間ぐらい、私も皆さんのご意見を聞かせていただくという機会をいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

相原館長

ありがとうございました。では、この会議は前回同様公開となっておりますので、ご承知ください。それでは、以降の進行は事務局の片岡さんをお願いいたします。

事務局（片岡）

（編集注：第2回編集懇談会は昨年12月開催であることから）明けておめでとうございます。皆さまとも本当に久々にお会いできまして、その間に色々新しく作らせていただきましたので、今日も様々なご意見いただければと思います。ZOOMにて今回、福森様ご参加されています。

（次第一2） 構成案（初版）について

事務局（片岡）

今回は結構ご意見などをいただく場にはなりますので、ぜひ福森さんも積極的にご意見いただければと思います。今回の議題としまして、大きく2つございます。まず1番最初に、記念市史の構成案、前回まで目次案と申し上げていたが、ちょっとこのワーディングを様々なところで整理しまして、構成案というところに今回まとめております。

記念市史の構成案について、本事業の編集担当、渡部より説明をさせていただきます。

事務局（渡部）

編集担当の渡部です。構成案について資料をもとに、簡単にご説明させていただきます。

まず、川崎市史市制100周年記念版とは何かということです。親しみやすく、手に取りやすい新しいかたちの川崎市史です。

事務局（浅井）

資料1（「議題1：構成案について」）をご覧ください。

事務局（渡部）

こちらの制作目的は4つございまして、1つ目が、川崎市の市制100周年を記念して、川崎市を知って、関わって、好きになってもらうことを目指し、令和6年度から3年間かけて新しいかたちの川崎市史を制作します。2つ目が、親しみやすく、手に取りやすいものとします。3つ目が、川崎市の歴史や文化を知ってもらい、次世代につなげるものとなります。最後に、市民に制作プロセスに関わってもらいます。

ターゲットですが、幅広い世代に読んでもらう内容としますが、特に若い世代や子育て世代をメインターゲットにしております。一方で、小学生から高校生ままで読むことができるようなかたちで配慮したいと思っております。

続きまして、コンセプトですが、3つのコンセプトがございます。1つ目のコンセプトが「分かりやすく・伝わるもの」。2つ目のコンセプトが「制作プロセスの重視」。3つ目のコンセプトが「デジタルの活用」となっております。次ですが、市民意見を本に取り入れるための3つの取り組みを行いました。1つ目が「アンケートの実施」です。これによりまして、市民の思う川崎らしさや川崎の歴史のイメージ、読みたいテーマの傾向を把握しました。2つ目が、「編集懇談会の開催」。まさに今この場になりますけども、こちらによりまして、市民が手に取りやすい工夫や興味を持ちやすいコンテンツが明らかとなりました。3つ目の取り組みが「ワークショップの開催」です。こちらで川崎にしかない、本書でしか語れない「激狭テーマ史」をアウトプットできました。

続きまして、その1つ目の取り組みであるアンケートの結果、集計結果の傾向を簡単にご説明させていただきます。設問の1つ目が「川崎市の歴史として思い浮かべるもの」はどのようなものかという質問に対しまして、主な回答としましては、「工業・工場」、「文化・スポーツ」、「川崎ゆかりの人物」などといった回答が上がってまいりました。次に、2つ目の質問ですが「どんな話題なら楽しい、面白いと思いますか」という質問に関しましては、「文化・エンターテインメント・スポーツ」、「川崎の歴史・うつりかわり」、「身近な話題（食・お出かけ・イベント）」などといった回答が多く集まりました。

これら2つの回答結果を基に、いくつかカテゴライズさせていただきました。「川崎の歴史・うつりかわり」、「物事の歴史を深掘り」、「身近な話題の『お出かけ』」、「川崎ゆかりの人物」、「いろいろな場所や建物」、こういったものが市民の読みたい話題ではないかと考えました。

そのアンケート結果を踏まえました構成案として、9つのコンテンツを作成しました。詳細につきましては、ちょっとお時間の関係で省略させていただきます。

事務局（浅井）

詳しくはこちらが別紙となっております。構成案の最後に載せております。

事務局（渡部）

続きまして、第2回の編集懇談会でいただいた委員の皆さまからの意見やアイデアをまとめさせていただきました。代表的なものをご紹介しますと、「テーマ史には、『大項目／カテゴリー』を設けたほうが全体を把握しやすい」、「川崎が成長してきた様子が分かるコンテンツを読みたい」などの意見をいただきました。構成案に組み入れることができなかったものに関しましては、テーマ史の構成に採り入れるとともに、書籍全体のポリシーとして反映させていただきますのでよろしくお願いいたします。

3つ目の取り組み、ワークショップで上がった主なアイデアを集約させていただきました。ワークショップではかなり白熱した様々なアイデアをいただきました。具体的なアイデアにつきましては時間の関係で省略させていただきますが、お渡しした資料の中でワークショップの詳細につきましては、この別紙の「令和6年度ワークショップ報告書」をご覧ください。

事務局（浅井）

こちらに、ワークショップで取り組んだこと、結果がまとめられております。それを踏まえて意見が反映されております。

事務局（渡部）

そのワークショップの参加者からいただいた様々なアイデアをもとにテーマを設定しました。設定のポイントとしましては、「記事としての深さ&狭さが期待できるか」、「『川崎らしさ』が表現できるか」、「取材が可能か」などを考慮して、テーマを設定いたしました。その取り組みで、市民の意見を反映した構成案が次の通りとなります。代表的な意見を反映したいくつかご紹介させていただきます。

まず、「かわさき定点観測」。こちらにつきましては、パートごとで行政区のバランスが取れるような形で配慮したページを目指していきたいと思っております。次の「川崎テーマ史」ですが、こちらは川崎らしい項目が彩り豊かに並ぶテーマ史のパートですが、「まちづくり」、「文化」、「産業・生活」、「教育・福祉」

といった大項目でカテゴリイズし、本書全体を捉えやすくしました。取り上げるのは、市民アンケートと編集懇談会からの市民意見を反映した「市民が読みたいコンテンツ」となっております。構成案の後半部分は「川崎市の、わた史」です。こちらにつきましては、川崎らしい人物を取材します。様々な立場、年齢の市民を取材したいと考えております。人選につきましては、編集懇談会の委員の皆さまの知見やご人脈をお願いできればと思っております。

事務局（浅井）

次回のお話ですね。

事務局（渡部）

次回それをお伺いいたします。次の「市民が考えた！川崎【激狭】テーマ史」は、ワークショップでいただいた市民からのアイデアを採用した本書で最もユニークなパートです。ワークショップにて、川崎らしいテーマを探り、その成果を採用しました。最後のほうに飛びまして、年表につきまして「川崎クロニクル」は、思わず読みたくなる年表を目指しております。「年表と本文をリンクしている」、「興味のあるカテゴリーのできごとを追うことができる」、「自分や家族の生誕年や記念の年と比較できる」、「川崎の外、日本の様子もわかる」など、市民アイデアを取り入れた年表を目指しております。

事務局（浅井）

これは第2回のご意見を反映したものとなっております。

事務局（渡部）

最終的な構成案につきましては、今後の取材などで変更する場合、その可能性がございますので、あらかじめご了承いただければと思っております。

それでは、この構成案の冒頭に入っている「めくってわかる川崎市の100年」のデザインイメージを簡単にご説明させていただきます。こちらは市の変遷を示すページでして、巻頭に配置することを想定しています。書店で販売する本の巻頭ページはかならず「見栄えがよくテンポよくページをめくれる」ことが条件となっています。今回、市域の変遷というテーマに対しては「めくることが楽しくなる仕掛け」を施しました。実際、具体的には透明フィルムページを使って川崎市の地図2枚を重ね、一見すると市域の区分けを示した地図ですが、フィルムページをめくると異なる情報、この例では当時の鉄道路線地図が現れる仕掛けとなっております。

次のページは、この「めくってわかる川崎市の100年」のデザインイメージを

示しておりますので、お手すきのお時間で拝見いただければと思っております。
以上で簡単ではございますが、構成案の説明とさせていただきます。

事務局（片岡）

ありがとうございます。今日はかなり大量の情報を短時間でお伝えしてしまいましたので、この後、感想をお伺いしていければと思うのですが、その中で、「これはどういった内容ですか」みたいなことも含めてお話を伺えればと思います。

ただ、総論と言いますと、やはり今まで様々な皆さまのご意見をいただいた結果、かなり色々な面から物事を見ることができるようになりました。あと何より最初にお話しさせていただいたペルソナをしっかりと分析して、誰に何を提供して、どういったことを伝えていくのかをある程度我々なりに明確にしていくことができたから、なんとかここまでたどり着いたと思っております。なので、これから先はよりブラッシュアップをして、より市民全体の方ないし県外の方がしっかり見てもらったときに、「川崎ってこんな街なんだ、良いな」とか、「今後こうなっていくんだ」というところをより楽しんでもらうために、皆さまのご意見を頂戴できればと思います。短時間の中で、忌憚のないご意見をいただければと思います。

大変恐縮ですけれども、今回から新しい制度が導入されて、毎回、皆さま大変多くのご意見をいただいておりますので、今回からこちらに（事務局の）鶴岡というタイムキーパーを設けました。なので、2分経ちましたら鶴岡が立ち上がりますので、おまとめの方に入っていただければと思います。

そうしましたら、前のホワイトボードに私もご意見を書いていきますので、名前順に（お伺いします）。

まずは望月様、ご意見いただければと思います。

望月委員

ありがとうございます。コンテンツのほうはメールでお送りいただいて、まだ詳しくは見ていないですけども、これまで2回ほどのこの懇談会の中で委員の方から言われたものをうまく含んで、構成されているなというのは実感として感じたところでは。読み物としても、あれもこれも（本に入れたい）というと、なかなかボリュームがどんどん厚くなっていくばかりなので、どう削ぎ落としながら、興味を持っているところをピックアップしていくというところでは、非常に面白い構成ができているのかなというふうに思います。

その上で、先ほどの川崎市の形成を最初の部分で取り組んで、あれもなかなか面白いと思っているのですが、私、歴史家の立場でアドバイスをしますと、川崎市は、現在の川崎市はそうなのですけれども、やっぱりその周辺も含めた形で「川崎」を考えないとなかなか難しいのかなと。

多摩川沿いには飛び地もありますが、元々は東京だった土地がたまたま多摩川が流れを変えたものですから、川崎に含まれて、今は川崎市に入っていたりする（地域もあります）。あるいは、昭和になって合併を進めていく中で、一つの話としては、かつての日吉村が矢上川を境に、東の部分が川崎市に入って、西の部分が横浜市に入っていくというような形で、地域が分断されながら川崎市が形成されていきます。もう一つ、川崎の地形の一つの大きな特徴が麻生区の岡上だと思うのですが、東京と横浜にサンドイッチされたあの地域が島状になっています。川崎市の地形の成り立ち、このコンテンツの中にもありますが、ぜひその辺も含めて、川崎市が、その周辺も取り込んだ形で今この形ができている（話題）があると、もう少し分かりやすくなるかなと思いました。

事務局（片岡）

今おっしゃっているところで、地形の成り立ちはすごく面白い（と思いました）。私は昔、東京駅の「銀の鈴」という待ち合わせ場所で、「昔こんなところだったんだ」と思って、すごく楽しかったなと思うのです。

これは、いわゆるターゲットとしては、地形の成り立ち（のターゲットは）、ちょっと川崎から外れたところとか、川崎周辺も入れることで、どちらかという市外の人とか、ちょっとまた一歩外の人に対して興味をより深めていただくというようなところがあると思います。ありがとうございます。そこの部分をぜひ検討させていただきたいと思います。

続きまして、羽賀様、お願いします。

羽賀委員

ざっと見て、私はこの「激狭テーマ史」がすごく面白そうだなと思います。今のコンテンツはどれも読み応えがありそうだし、多分、私世代の人にとっても結構食いついているところなんじゃないかなと思いました。

あとは、この「めくってわかる（川崎市の100年）」のページで透明になっているっていうのも子ども向けとしてもすごく面白そうだなと思ったのと、あと見たいと思う点では、このフィルムのページじゃなくても良いのですが、昔の写真と今の写真がなんか同じ場所が合わさって重なるみたいなのが読みたいなど

思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。割と今のお話だと、若者目線で見たと時に、総論、読みたくなるものであるというイメージで合っていますかね。

羽賀委員

はい、そうです。

事務局（片岡）

なるほど。今後は情報発信のところにも生きてくると思うのですが、より読みたいなと思っているものを今後どういうふうに発信していくと、より購入とか、持ち続けたいものになるかってところの部分で、ご意見を伺えればと思います。また後ほどお話を伺えればと思います。ありがとうございます。

にしにし家様、お願いします。

にしにし家委員

そうですね、まず一番最初のこの『めくってわかる川崎市の100年』はすごく良いなと思いました。一番最初にこのテンポよくめくれるみたいなのも、私の中の「本を読む時の最初の必要なもの」だなというイメージと合っていて。

どちらかという私は本を読む方なので、とっつきにくい内容だったとしても読めちゃうは読めちゃうんですけど、読まない人からしたら、本当にその一番最初のところしか読まないのかなと思っているので、何かしらギミックでなんか使えるってところが一番良いなと思いまいました。

他の内容に関しては、これまでの内容が反映されていらっしゃるということで、良いなと思ったのですが、ちょっと気になったのは構成の問題で、最初のこの1ページ目「いつだって川崎は、【川崎テーマ史】」は結構長いので、せっかくカテゴリーごとに色分けしているけど、ほぼ同じ緑色で埋め尽くされているのが、カテゴリーの色分けの意味が失われちゃうかもしれないので、この「まちづくり」、「スポーツ・文化」、「工業・農業・環境」等の単位でもちょっと変えても許されるのかな、みたいなのはちょっと思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。まさにコンテンツメーカーならではのご意見だなと思ったのですが。そこで言うと、多分、今のお話のカテゴリーの見せ方というところで、結論で言うかどうかというふうにそのカテゴリーを指して、相手からの興味を深くさせていくかということになると思うのですが、ただ、見え方、視認性

のところで、工夫をしたらどうですかというところのご意見があったと思います。

逆に、カテゴリーの分け方的には、今の方向性でなんか心に刺さりそうなイメージで合って（いますか）。

にしにし家

そうですね。ジャンルの、分け方としては問題ないと思っています。

これ以上、誰でも読むかっていうと、そんなことはないと思うので、本を読まない人はほとんど読まないの、覆せないと思うんですけど、読める人、読む人の中では別に特に良いなと思っているのが、そのカテゴリーよりも「川崎は胸を熱くするスポーツがある」とか。ちょっと気になるような文章を大きくしているというところが良いなと思ったので。

だから、分け方としてとか、そこら辺の見せ方としてはグッド（だと思います）。

事務局（片岡）

ありがとうございます。なんかちょっと褒められすぎて、ムズムズしちゃっているのですが、総論、そういった見え方にしていくということで、ありがとうございます。ブラッシュアップしていきます。

すみません、順番的に福森様になるのですが、福森様いかがでしょうか。

福森委員

構成を改めて見て、硬軟を織り交ぜてあって、すごく魅力的な冊子になりそうだなという期待が膨らみます。川崎の100年の歴史と言っても、多分ここ数十年、数年のことが結構多いのかなと思うのですが、市長もおっしゃった通り、今、川崎市のブランドイメージがすごく良くなっているのですよね。シティセールスさん（编者注：シティプロモーション推進室）の功績だと思うのですが、そういったイメージが良くなっているのを、後追いというか、これで追認できるかなというような感じがしますね。

市民活動は、割と負の、社会の暗部と言いますかね、社会の課題を解決したりして、地域の課題を解決するというところで、後ろ向きのところからスタートすることが多いのですが。最近の市民活動は、やっぱりまちが好きだからとか、この人が好きだからという、なんかすごくポジティブな動機で始められる方も増えているので。市民活動をこれからしたいということ、この冊子を読んで、始

められる人も増えるじゃないかなと、すごく期待が膨らみます。

なんか構成の意見ではないのですが、全体のイメージとして、そういうふうに感じました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。まさに今、市民活動の部分で広がりを持っているとより良いというお話（ですね）。川崎はご存じだと思うのですが、南北に長いまち（です）。やっぱりコミュニティの醸成は北と南で作られにくいところが、この本をきっかけに出来てくると、よりシビックプライドの向上に繋がってくるのかなと思います。ちなみに今回のこの冊子があることで、そういったコミュニティづくりにドライブできそうなコンテンツがもしあったら、1個ぐらいいただけたりすると参考になるのですけれども、何かございますでしょうか。

福森委員

そうですね。自分の住んでいるまちがこうやって成り立ったのだなというような（コンテンツでいうと）、二ヶ領用水もそうですし、遺跡の数とか、そういったところはすごく関心を持たれて、それをもっと深掘りしようという方も増えてくる。今でも、たくさんの方がいらっしゃるのですが、これからもそういう人が増えてくるだろうなと思いますし、やっぱり川崎市は本当に人権意識が高いまちだなと思うので、そういった先駆的な施策を進めている川崎の前向きな取り組みも、引き継いで、自分たちもやっていこうという活動につながるんじゃないかなと思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。そこらへんはより深掘っていく時に「こういうふうなことを入れると、よりコミュニティ醸成にも繋がるんじゃないかな」のところでまたご意見いただければと思いますので、その時はぜひよろしく願いいたします。

続きまして、中村様、お願いします。

中村委員

なんかすごくまとまって、にしにし家さんが言う通り、なんかタイトルも面白い感じになっているなと思っています。仕掛けのページもすごく開きたくなるような、触りたくなるような感じで、どんなふうにそこが詰まっていくのが楽しみだなと思っています。ターゲットも、いろんなお話があった中で、若い世代とか子育て世代というところと、あとは小学生から高校生というところもターゲッ

トにあったので、実際、パーっと見てみると大人の私たちはなんとなく分かるのですけど、どこの子どもがターゲットなのかなというのが（気になります）。私には中学生と小学生の子どもがいますのですけど、小学校1年生と文字が分からないような小さい子どもはターゲットじゃないとして、ルビを振るのも非常に大変なので、そこまではと思いつつも、そうやって見ていくと、なんか155ページの「川崎クロニクル」はもう分からないな（と思います）。

やっぱりこの書体とかは、私はこれが好きなので、すごく読みやすいのですけれど、なんか「川崎しし（市史）ちゃん」みたいなキャラクターとかがいると、子どもたちって、なんか絵とかあると、一気に馴染みやすくなるので、もしかしたら一人可愛いキャラクターみたいなのがあったら、それだけで子どもは手に取る機会にもなると思うので。「お母さん、これって何？」みたいなきっかけ作りがあると良いなと思いました。

あと、目次のところで、この意見はちょっと消えたのだと思うのが、川崎と海外をなんか繋ぐようなものはちょっと残ってなくて。川崎って、海外からの繋がりとか、この前も言ったのですけど、友好都市がなぜあったか。この前、（韓国の）富川市の方がいらっしゃった時に、私は富川市の方が来て、なんで富川市が友好都市なのだろうか、やっぱり初めて触れてわかったのですけど、それを今日言おうと思っていて、向こうもこっちを理解しようとしているのを知りました。それこそ麻生区役所にある資料をすごくたくさん見て、こんなに僕たちのことを知ってもらおうとしているのだ、日本語が喋れる韓国の方が全部通訳していて。なんかその姿を私たちが見て、私たちのことをこんなに理解してくださる海外の方がいて、これは友好都市だから、なぜこうなったのかというのを分かった上で来てくださるのはすごく深い話だなと思っているので、前にお話したださって、やっぱり海外の視野も1つあると、また開けた市史になるのかなと思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。大変様々なご意見をいただいて、すごく参考になります。

まず、ターゲットのところは確におっしゃる通りで、子どもをどこまで入れるのかとか、読んだことによってどんな体験を感じてもらおうのかというところは、今後すごく詰めていかなければいけないかなというところでは。

キャラクターに関しては、川崎にはキャラクター問題というぐらいのたくさん

キャラクターがいて、そこをどう整理し、そういったところの取り組みとかも一つ、こういった100周年のタイミングを機にチャレンジしてみるのも一つ面白いかなと思ったりするところもあります。

細かいところで言うとルビとか、あと「クロニクル」。まさにおっしゃる通りで、そういったワーディングも含めてより視線を幅広めにして考えていきたいと思っています。

海外については確かにおっしゃる通り、先ほど望月さんがおっしゃっていた、地形の成り立ちとかで、外側の方とかにも興味をより持ってもらうところがあったと思うのですが。あくまで僕らはどうしても川崎市史なので、川崎の市民（がターゲットになる）というところがあって、確かに相手も僕らを理解してくれていることに対して、しっかりと形にとっていくのだというところは伝えきれていないと思いますので、ぜひそこは検討していきたいと思います。ありがとうございます。

続きまして、竹内様お願いします。

竹内委員

全体にバランスが非常に良くなったと思いますし、今お話にあったような、やはり小学生とかが一番大事な要素だと私は思っているので、「クロニクル」もそうですし、「ダイバーシティ」とか「エネルギー」とかという言葉は、なるべく分かりやすいような言葉や単語を使った方が良いでしょう。

ざっと拝見して思ったのが、個々のコンテンツは非常に面白いと思うのですが、全体の流れが分からないですね。せっかくこういうものを作るので、100年の大きな流れをコンテンツに入れたらどうかと思います。それは、この「めくってわかる、川崎市の100年」に2ページぐらい付け加えるような、「1分でわかる川崎100年」というような、単純化して語って大きな流れをまず理解してもらうと。

私の理解で言うと、川崎市は、最初は工業化しつつも農業中心のまちだった。それから急速に工業化が進んで、日本有数の重工業地帯、製造業のまちになった。並行して宅地開発が進みましたというのがおおよそ今まで大きな流れだったのです。後半の50年ぐらいになると、その「住むまち」という側面が強まって、皆さん東京とかに働く場所があるとなって、そこがどんどん強まっているのですが、この20年はまた少し景色が変わって、地域全体が非常にバランス良く、人口の面でも発展してきて、産業政策の一部では最先端を走っていて、さら

にこの15年、20年ぐらいで考えると、その文化とかスポーツとか多様性とかが非常に重要なキーワードになっていて、川崎市民だけではなくて東京とか横浜の人も喜んで来ていただけるような場所になりつつあると、とても活力のある楽しいまちであると、これが今の川崎のイメージだと思いますね。

これを非常に単純化して語ることによって、それを最初に持ってくればですね、流れが分かると思います。それを踏まえた上で個々のコンテンツを読むと理解が格段に高まると思いますので、そういったことをちょっと考えていただいたら良いかなという、私の意見です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。めちゃくちゃ射ていてと思いました。

2点あるかと思います。今の時代、動画もそうですけど、例えば映画もYouTubeとかだと、30秒でわかるみたいな（解説動画がある）とか、あと本も1冊を5分で全解説してくれる（というものもあって）、もう本当に時代はやっぱりそういう時代になっていると思うのですよね。

面白いのは100年後にこの本を見た時に、なんか100年前にこんなのをやっていたんだということになる。僕らが古事記や魏志倭人伝を見るみたいな感じの感覚になった時に、「当時は、なんかこれ1本にまとめるのが流行っていた」のトレンドでみたいな（コンテンツ）とか、そういったぎゅっとまとめて、そのときのトレンドを入れているのもすごく面白いと思いますし、あとやっぱり何かを伝える時に必ずサマリー（編集注：要約、概要）は絶対あるべきだと思うので、そこは是非色々な話題が入っていけば入っていただけそこをしっかりと深めてサマリーで伝えるのは重要だと思いますので、ぜひそこはしっかりと検討させていただきたいと思いますよ。ありがとうございます。

続きまして、高田様お願いします。

高田委員

大きく3点あります。

「044 川崎は多くの人があつまる街（住まい）」に「いつの時代も住みやすい川崎」とあります。今後もタワーマンションが増加するエリアもあり、人口増加により、街に活気があふれ経済的なメリットも大きいと思います。一方で今回、本の制作期間が3年あるため、人口増によるデメリット、例えば最寄り駅の混雑などの市民目線も想定し、記載可能な対策も書くことができると良いかと。

川崎市の街の変化が早いため、そういった外的要因による制作中と制作後のタ

イムラグを考慮するほうが良いかと考えました。

2点目が、「070 川崎はものづくりのエナジーがある（工業）」の「工業」という言葉や、次の「農業」という言葉が、今のお子さんたちにとってフィットするかを考えるほうが良いのかなと思いました。

当社名を記載していただいています、ものづくりの表現は良いですが、工業という表現に関しては、現在はビジネス形態が大きく変化しています。「私たちは工業やものづくりの会社でした」と歴史を伝える必要性は分かるものの、今のお子さんや3年後のお子さんたちに向けては、伝えたい内容を考えていければと考えます。なお、会社名の順番は「あいうえお順」などにしていただけると良いと思います。

最後に「148 規模を表す数字」は、先ほど中村さんからもありましたし、望月さんからもありましたが、日本の中で、世界の中で、川崎市の面積や人口はこのくらいだと事実が見せられて、自ずと世界の中での規模感が伝えられると良いと考えます。海外旅行をしていると海外の方から「日本は首都周辺の限られたエリアに人口の3分の1の人が住んでいるでしょう」と言われます。川崎市もそのエリアに含まれますが、こういった日本の特徴を書くことでグローバルに読者とコミュニケーションが取れて良いと感じました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。確かに良いところばかり書いたことよりも、しっかりなぜそれを信頼できるのか、Reason to Believe（编者注：信じる理由）じゃないですけど、なんかそういったところでネガティブもしっかりと入れたりするとか、「そういった歴史があったのだね」というところを確実に入れていくことが、市史としての信頼度も上がると思うので、どこまでそれを書くのかはしっかりと考えた上で、そこは書いていきたいと思っております。ありがとうございます。

続きまして、反町様、お願いいたします。

反町委員

まず年末、私欠席してしまって申し訳ありませんでした。すごく出たかったのですが、ただ今拝見をしたら、欠席にあたって、メールで色々送らせていただいた内容が反映されていて、すごく嬉しかったです。

ということで、このコンテンツのところを拝見させていただいて、全面いただいていたので、それも見ていたのですけれども、本当にもう網羅的にされてい

て、すでに川崎好きの人間としては本当にワクワクするような、川崎を好きになる、もっと好きになる、そういう内容のものができそうだなっていうワクワク感をまず感じました。このコンテンツの書き方もにしにし家さんがおっしゃっていたと思うのですが、この書き方もすごく良いなと思いました。なんか普通の箇条書きで書くよりも、目を引くと思うような書き方になっているので、すごく面白いと思いました。

この部分については、特に私のほうからはあまり細かく具体的な意見はなくて、この資料1「構成案について」10ページの、「ワークショップからの主なアイデア」をちょっと拝見させていただいて、今数えたら、項目的には32個が上がっている中で、一つずつ見させていただくと、「これもすごい」、「なるほどな」と思って、鉄道のところとか、私がこのワークショップに参加できていたら、絶対話したかったのですけれども、「私鉄が進めてきた街づくりの歴史」が入っているのとかも嬉しかったです。

逆にこの中で私的にキーワード的にちょっと入れたいなと思ったのが、1つが「音楽」というワードです。「ダンス」とかも入っている中で、多分この中には「音楽」が、ちょっとまだ入っていないかなというところで。音楽のまちづくりをやって20年経ったのですけれども、これは20年前から始まったわけではなくて、その前もずっと歴史があるのですね。川崎って本当にそこもすごいところだと思っています。ですので、掘り下げればさげるほど、いろんなエピソードとか人とかというデータはあると思っています。

あともう1つは、「商店街」というワードも含めた形でいけたら良いなというふうに思ったところです。

とりあえず私としてはそんなところです。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。最後の「『商店街』というワードも入れていけると良いな」というところですけど、これを入れることで、どんなことが起きるから、入れてみたいなというようなイメージですかね。

反町委員

川崎は素敵な商店街がいっぱいある中で、まずその魅力的なところで言うと、全国レベルで誇れるような有名な商店街っていうものもあります。

皆さんご存知だと思いますけど、例えば、「ブレーメン通り」という元住吉のすごい商店街があるんです。あとは、例えば川崎駅の目の前で、東口代表でいう

とやっぱり「銀柳街」というアーケードのまた立派な商店があるんです。本当にそのすごい歴史もあって、魅力もある。それに関わっている人が多い。それをうまく入れていくことで、この市史をもっと広めていったりするきっかけにはなるんじゃないかなというところで、それはちょっと効果的に入れていくって意味もあるかなと思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。総論としては、この商店街の成り立ちみたいなのところをしっかりと見ていくことで、人の広がりや繋がりとか、そこにどういう商売があったか、工業と絡んでくるとは思うのですが、そこからまちの繋がりが見えるので、商店街からフォーカスしていくと面白いじゃないかというようなイメージでしょうか。

反町委員

そういうことです。

事務局（片岡）

ありがとうございます。そうでしたら、鈴木（勇）様、お願いいたします。

鈴木（勇）委員

まず、大きなところから申しますと、先ほど望月さんがおっしゃったように、やはりこの川崎市の市域ができてくる周辺のところは重要だと思うのですね。そういう市域ができていく中でかなり大きな要素は、やはり横浜の動向だと思うのですね。突き詰めてみると、川崎市の市域ができていくというのは、結局、横浜市との陣取り合戦みたいなのところがあったわけなのですから。

それをもうちょっと具体的に見ていくと、「川崎市ができたよ」。海沿いに（広げて）いくのかなと思ったら、横浜が「鶴見、俺たちが取ったよ」と。今度は山の方にいこうかなと思ったら、「日吉、俺たちが半分取ったよ」とか、だんだん横浜市が悪者になっていくのですが、あまりそういうふうなものはまずいかなというところで、とはいえ、なかなかみんなに、読んでもらうためには、ちょっとエッジを効かせたところも必要なかな、ここはバランスかなと思いました。

2点目、細かい、色々なトピックは日常生活に関わるようなことですね。「食」に関わるようなこととか、やはりこれは読んでもらうためには非常に重要なことだと思うのです。ただ、こういう日常的事は、なかなか資料が残りにくいところがあると思うのですよね。私自身も研究をやっている中で、こういった大上

段のものよりも、どちらかといえば、日常生活に関わるようなものを割合に好んで研究してきたのですけれども、それだけになかなか分かりにくいところがあると。例えば川崎大師の葛餅、名物であるわけなんですけれども、分かっていることといえば、明治20年代ぐらいに池上本門寺の前から来たらしいぐらいのことしか分かってないわけなんです。ですから、歴史としてある程度書いていく場合、こういう日常的なところがどこまで付いてくるのかというのがちょっと気になりました。以上です。

事務局 (片岡)

ありがとうございます。そこは勉強させていただくかもしれないです。しっかりその部分はエビデンスでも必要になってくるので、その時はぜひ色々と逆にご教授いただければと思います。

続いて、鈴木 (ひ) 様、よろしくお願ひいたします。

鈴木 (ひ) 委員

鈴木さんの「つづき (すずき)」ですね。

前回欠席だったので、申し訳ありません。ちょっと前回の内容をもしかしたら把握していないので、議論済みでしたら申し訳ございません

まずは構成を拝見して、特にやっぱり「川崎【激狭】テーマ史」と、「地図で感じる 歩きたくなる川崎史」ですけど、とてもユニークだなと思いました。

これだけやっぱり網羅的な内容だし、ターゲットも広いので、ちょっとドライの言い方なのですが、全ての人に全部読んでもらうのは無理だと思うのです。どちらかという、興味ある人が興味あるところを読むということになるんじゃないかなと。そうするとやっぱり、いかに手に取ってもらうかはとても大事なことで、そうした時に、やっぱ最初がとても大事だと思うのです。先ほどの仕掛け（「めくってわかる 川崎市の100年」）、仕組みはすごく面白いなと思ったのですけれども、1番に目を引きそうなコーナー、それを前に持ってこられないかなと思ひまして。

例えば「まっぷる」とか「るるぶ」とかの旅行誌とか見ても、「ここの観光地はこれがおすすめのコースです」みたいな、それを見ただけで行ってみたいかならないですか。そういう意味では、例えば「歩きたくなる川崎市」を最初に持ってきて、それを持って家族で出かけるみたいな。行った先で、電車の中で、移動途中に興味あるところをパラパラ見るとか。やっぱり最初の取っ掛かりで、興味を感じてもらうところはすごく大事かなと思います。理想としては、できればそ

れを読んだ中で、ここに関してより詳しく知りたいところは「こっちの歴史の深掘りの方で見られます」みたいなというフックをかけるみたいな、そういうページが最初の方に持っていくと良いなと思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。まさにおっしゃる通りですね。

そこは雑誌だけではなくて、やっぱり人の興味がある部分にフォーカスすると絶対的に必要なところだと思うので。現状としては、コンテンツがしっかり色々揃っていているけれども、さらにそこから次のステップで手に取って、どう読んでもらうのかというところは再考しなければいけないのかなと思うので。ぜひこのパワーコンテンツを前に持って行って、そこから深掘りをナッジ（编者注：人の行動をそっと後押しするアプローチのこと）するみたいなところ、ぜひ検討させていただきたいなと思います。ありがとうございます。

続いて嶋田様、お願いいたします。

嶋田委員

今までの話を色々細かく全部入れ込んで頑張られたな、というところがまずあるのですが。

最初に2点。1点は、私、小学校の総合の授業とかで講師をさせていただいたりとか、中学校の学校運営会議も（参加していて）、そちらで中学生と話したりする機会があるのですが、学校のその教育現場ではやっぱり地域の勉強を子どもたちがしていて、地域に対する興味・関心が高かったりするんですね。そういう視点で見ると、「自分の地域は、（本の）どこに出ているのだろう」というのが気になるかなと思います。切り口として、我々だと幸区ですけども、「幸区は何があるだろう」というのが、これは索引なのか、それともタイトルの下に「これ何区ですよ」みたいなのが出たりするのがあったりすると、子どもは自分の地域はどれだろうと思うので、読んでもらえるんじゃないかなと。

もう1点が、今回は川崎市市制100年（を記念して）作るものなのですが、この先、要は何年後の方が見た時にどうなのですかね。将来に繋がる内容もあって良いのかなと。50年後、100年後には、我々はどういう風に今を考えているだろうか、ということがあったりするとか、10年後、20年後の方がこれを読んだ時に、「10年前、20年前はこうだった」、「今と違うのだな」というのを感じてもらったりとか、というものがあっても良いかなと。今から100年を振り返るだけではなくて、将来の方が振り返ってもらえる資料であったりするとか、そういうの

もあって良いじゃないと。そういう機能があっても良いのかなと思いました。

大きくはこの2つですが、細かくは、例えば「056 川崎は 街にアートが溢れている（アート）」のところで「かこさとし、岡本太郎」と書いてありますが、かこさとしさんの作品は街に別に溢れてなくて、この辺りとか、多分、実際に、紙面を作っていくにあたって、この書いているところと結構ずれが生じてきたりするのだろうなと思いました。これもすり合わせをしてくのが大変だろうと思いつつながら、うちの地元でいくと、国宝の「秋草文壺」があるのですけれども、出土したところは、今、民家の中で入れないのですね。秋草文壺自体も上野の国立博物館に行っちゃっているんで、見られなかったりするんで、「その辺りに出たよ」ということではあると思うのですが、実際のコンテンツ作りは、やっぱりその見出しとか変わってくるのかなとちょっと思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。まさに先ほど鈴木（勇）さんもおっしゃっていた日常のエビデンスみたいなところをある程度取っていかないといけないですよね。もう早速出てしまったってところと、そこはしっかり確認を取ろうと思いつつ。あとペルソナに「新しい未来の川崎市民」というのが出てきたと思っているし、そこらへんもコンテンツを考えるとすごく面白いなと思うので、ぜひ検討させていただきたいと思います。ありがとうございます。

続いて落合様、お願いします。

落合委員

前回の市史に関わった立場としては、先ほど市長からご指摘されてしまいましたが、今回は（公文書館の）館長さんからも、事前に、そういうコンセプトではなくて、むしろ分かりやすいやつという話をされていたので、どんな感じになるのかというのをずっと期待していたのですが、先日拝見させていただいて、なるほど、こうなるのかということで、すごく僕の中では感動したというか、感心したというか、「こうきたか」みたいに思いました。

それを踏まえて3つ、4つ、ちょっとお話をさせていただきますと、1つは、例えば僕、宮前区に住んでいて、秋祭りとかそういうお祭りを各地でやったりするような、地道な活動というのを何らかの形で入れたら良いんじゃないかなという気がしました。それで、自治会の方とかも、うちのところだと親和会というのがあるのですが、そういう人たちはすごく熱心にやられている方が多いので、今回トピックを取り上げられているので、「きらぼし」みたいな感じのだけ

ど、もっと川崎で地道に、こういう活動をされている方のものをいくつか入れてあげてほしいなというふうに思っています。

それからもう1つは、2番目は、逆に歴史をやっていると、私の友人が金刺市政について（研究を）やっていたり、あるいは石井泰助さんについてやっていたり、やっぱりリーダーシップというのがあって、それが今の川崎に繋がってくる部分もあるので、市長が隣にいますのでちょっとあれですけど、例えば市長とか、そういうリーダーシップや行政の人たちが、どういう市を作っていくのかということも、少し歴史の立場としては、あっても良いかなというのがもう1つ思いました。

あとそれから、同じ地道な部分で言うと、災害みたいな部分もあっても良いです。あとそれから、今アートの部分で「かこさとしさん」というのは、街には溢れていなくても、例えばそういうアートの土壌、多くの人たちが受け入れようという土壌があるのです。あるいは、スポーツにすごい選手がいるのだけど、その背景には体育とか、学校教育の中でどういう教育が行われていて、それが背景にあって、こうなったとかですね。そういう、あまりここの中の短い文章に全部入れられるのは難しいでしょうけど、ちょっとそういうものも押さえた上で書いていただければと。だから、この内容はすごく魅力的なのですけども、それをどう描いてくれるのかなというのをすごく期待しています。

あと、最後、年表の部分。年表の部分も良いのですけれども、なんか僕の中で日めくりみたいな感じにしても面白いかな。例えば、1月の1日に川崎で何があったとか、3月4日に何があったというようなものもあっても良いかなと思います。以上です。

事務局（片岡）

本当に新しい視点、リーダーと市の変化とか、まさにアメリカも大統領が変わって、ガラッと世界情勢自体が変わっているところがあると思うので、なんかそこら辺にフォーカスしてもすごく面白い、勝手に私が興味あるなというところなので。そういったところもどこまで書けるかはありますが、色々と考えていきたいなと思っております。ありがとうございます。

そうしましたら、大島様、お願いします。

大島委員

前回私もちょっと出られませんでした、大変失礼しました。

3回目に来たら、もうこんなに出来ていたんで、来月ぐらいに本が出来ちゃう

ぐらいと思っているのですけれども。

今、皆さんのお話を聞いていて、その川崎市の100年というテーマの中で、川崎市以外もあるよねということとか、年表も縄文からとすると100年じゃ足りるかなというのもあったりして、そこら辺の境界をもうちょっと皆さんと、話し合えたら良いなと思いました。

それから、先ほど中村さんからの意見もあったのですが、若者の中で、小学生とか、読みやすさみたいなものを、この本、多分構成のところでは200ページぐらいのものをイメージしていらっしゃるのでしょうかけれども、いろんな話をを入れていくと200ページで収まるのかなとか。お子さんたちが読むことを考えると、これ以上分厚くなると、1冊5,000円だと、やっぱり買いづらいというのもあったりして、このあたりのバランスを取るのが（重要だと思います）。

私は普段そういう本とかの仕事やっているので、これ以上（内容が）増えると、またあれだからというのを思いながら、お話をうかがっていたところでもあります。中身はすごく面白いと思いますし、私もすごく読みたいなところがいっぱいあるので、ここから皆さんで苦渋の選択というか、ここを切るとか、こういうのを足した方が良くないかというところの中でバランスをとっていくのが難しいのかなと思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。そうですね。ボリュームとコストのバランスは難しいですよ。

勝手に、川崎市史がデアゴスティーニみたいに「今回は創刊号、市長と〇〇」みたいなものがあったりすると面白いなと、思ったのですが。

確かにそこら辺はボリュームとか、読みたいものを選ぶみたいなのだったりとか、そういうのも一つあったりするとなんか時間的にも読みやすくなってくるのかなと思ったのですが。そこも一個のアイデアとして色々考えていきたいと思っています。ありがとうございます。

そうしましたら、大城様、お願いいたします。

大城委員

なんかこの話が充実しすぎて、「これも良いね」、「それも良いね」と思っているうちに、何を言おうと思ったか分からなくなったのですが。言おうと思ったことだけ言います。

1つはターゲットの話で、中村さんからも話があったところですが、私は

「こどものまちミニカワサキ」という活動をしていて、(子どもが) まちに興味を持って、自分で動けるようになるのは、やっぱり4年生だなと思うのですね。まちなことを勉強し始め、社会科が始まって、もうちょっと頭が温まってきたみたいな感じなのかなと思うので、10歳以上ぐらいから、地域で特に活動する、地域の学校に行っているの、中学生くらいが多いと思うので、10歳ぐらいから中学生に一番届けたいなと、私は思いました。

2つ目が、今回の100周年の時に、他の都市と比べて川崎市はこうだという動画があったと思うのです。あれは子どもたちに結構キャッチーで、「他と比べてこうなのだ」って、すごく見やすかったのですね。

「他のまちと比べて、うちはこうなんだ」というので、だんだんまちを認識していくなと私も思うのですね。おじいちゃん、おばあちゃん(のまち)、うちは九州ですけど、九州のまちと比べて「こっちはこんなに大きいんだ」とか、「狭いののに大きいんだ」とかを比較して、うちの子どももそれで夏休みに自由研究をしたりして。数字で気づけるみたいな、皆さんもおっしゃったと思うのですが、他の都市と比べて、「こうだ」というのは分かりやすいので、他との比較は欲しいなとちょっと思います。

お話を聞いていて思ったのが、「2025年度 今から見た未来予想図」みたいなのは、ちょっと最後のページにあっても面白いかもしれないなと思って。そうすると、未来になっても、「あの時こう考えていた、今これ実現したけど、これ実現してない」とか、ちょっとあると「これからの100年史」にもなるかなと思います。

事務局 (片岡)

ありがとうございます。今回なんか(順番が)後ろにいくと段々未来の話がでてきて、確かに面白いなと思って、そういった観点でものを見たいのだから。

あと一番面白いなと思ったのは、他都市との比較ですね。私も子どもの頃に「日本は狭い」とずっと言われていたのですが、意外と「イギリスより大きいじゃん」みたいな話とか。「島国」と言われて、なんだっけということがすごくあったりする。最初に望月さんもおっしゃっていたのですが、地形だったり数字だったり、そういったところを他都市と比較することで、「自分たちが今どこにいる」みたいなところも分かって、それが100年後に、こういったことを目指しているみたいなことになるかもしれない。そこら辺は将来も含めて、数字だったり地形だったりとかのところも合わせて一緒に考えて、企画してい

たいと思います。ぜひアイデアとして考えさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

最後に阿久津様、お願いいたします。

阿久津委員

もう本当に、出尽くして絞り出すのがもう。メモしているものを全部（先に言われてしまって）「あー、あー」みたいな。

でも本当にすごい、皆さんの深い意見を聞き、納得だなというところですけど、私もコンテンツも読みやすく、やっぱり小学生にはちょっと難しい言葉もあるので、注釈みたいに入れると違うのかなとか。

あと、色分けされているので、見やすい点はあるのですが、大まかで良いので、絵文字とかアイコンとかで、ぱっと見て、視覚的には「ここ興味ある」みたいな形で、入り込みやすくなると良いのかなとか、あまりごちゃごちゃすると良くないので、バランスが難しいかなと思うのですが、それをちょっと思いました。

内容は、どれもすごく素晴らしくて、全部読みたいなど。私もまだまだ知らないことだらけなので、勉強になるなって。目次だけですが勉強になるなというふうに思いました。

「アート」に関するところの、056 ページですけど、これは、アートというのがどの範囲なのかということが、ちょっと気になって。最近、大山街道ふるさと館でイベントさせてもらうことがあって、あの建物が結構お洒落で、意外とすごい建築家の方が（建てられた）ということがあって、他にもそういう建物があるのかなというふうに思ったので。ページが増えるのはあれですけど、建築物もあると面白いかなというふうに思いました。

あと、未来のことをおっしゃっていたと思うのですが、私も真っ先に、これをすごく読んで、歴史が分かって、今が分かってきた時に、今の子どもたちが、将来をどういう風に想像するかということを思っているし、過去と今を知ること、将来のことも想像しやすくなった時に、最後のページに未来日記みたいなのがあって、その本を手にした時に、自分たちの今思っている将来の構想を、（形式は）なんでも良いと思うのですが、書くスペースみたいながあると、その本に愛着も湧いて、「ずっと持ち続けてもらいたい」というふうにおっしゃっていたので、将来になった時に、大人になった時に「こういうこと書いていたのだ」みたいな、色々フィードバックしたりとかして、思い出の本みたいなものに

なるかなと思いました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。確かにアートだったりとか、そういった区分だったりとか、将来のことだと思いますけど、今は確かに「建築物はアートじゃない」わけじゃないですけど、そういったところも、範囲とか、将来を見越して、色々とかテゴライズしていくのも一つの視点なのかなと。そこもしっかり検討させていただきたいなと思います。ありがとうございます。大変多くのご意見をいただきましたので、これをしっかりと噛み砕いて、良い形にしていきたいなと思います。

相原館長

議題1につきまして、皆さま、ありがとうございました。

構成案につきましては、今後、皆さまからいただいたご意見、アドバイスなどを取り入れながら、年度末に向けて、成案の決定に結び付けてまいりたいというふうに考えております。

ちょっと余談ですけれども、未来予想図というお話があったのですが、「21世紀の私たちの川崎」というのを20世紀の人が考えたというのが、実は本庁舎の地下通路に展示がありまして、そちらをご覧いただくと面白いかなと思います。ありがとうございました。すいません、余談でした。

それでは、議題1の意見交換を通じまして、福田市長から一言コメントをいただきたいと存じます。

福田市長

どうもありがとうございました。予想通りと言ったらあれですけども、本当に皆さん素晴らしい意見が出て、結構良いのが出たなというふうに思います。アイデアを膨らまして、呼吸のようにダウンサイジングして、また膨らまして、というのを何度か繰り返していった時に、ジャストな部分が出てくるんじゃないかなというふうに思いました。

やっぱり皆さんの意見を聞いていて、最終的に難しくなってくるのが、どこのターゲットだろうというところですね。最初ターゲットは小学校から高校生までと書いてありましたけれども、実は相当に幅広くて、小学校の高学年に当てるとかになると、本当に難しいですね。情報量と、分かりやすさと、正しさを、どこでバランス取っていくかのところが。最終的に「これじゃちょっと情報薄すぎない？」というふうなことになってくると、どこに本当のペルソナを設定するかというのを実際、具体的に書いてみていた時に、出てくるんじゃないかなという

気がしますよね。なんか1つのテーマについて1回書いてみて、そうした時に、「これじゃ薄すぎる」とか、あるいは「これじゃ濃すぎる」とかというふうな、本当にこう呼吸するように、これから繰り返していくなかで、ジャストフィットになっていくんじゃないかなということを感じさせていただいた1時間でありました。こうやって、いろんな方々が集まると、違う角度の意見が出て、本当に面白いというふうに、大変勉強になりました。

引き続き、どうぞよろしく申し上げます。ありがとうございました。

相原館長

ありがとうございました。市長と委員の皆さんで記念撮影をしたいと思います。
(記念写真の撮影)

相原館長

福田市長は退席されます。
(市長のご退席)

事務局(浅井)

福森様もご退出されます。
(福森委員のご退席)

(次第一3) 情報発信について

事務局(片岡)

そうしましたら、2点目の議題の方に入っていきたいと思います。

まず1点目は、皆さんにご感想をいただいたのですけれど、次はどちらかというと全員の方にご意見を伺うというよりかは、これらを情報発信、やっぱり結局読んでもらう人にしか発信できないと、いくら良いものでも埋もれたままになってしまいますので、そこの部分をしっかりと情報発信していくところを進めていきたいなと思っております。

そうしましたら、この情報発信の考え方をディレクターの浅井の方から説明します。

事務局(浅井)

この資料2(「市民への情報発信について」)と、こちらのA3の紙面の方が資料です。

まず、この市民への情報発信についてですけれども、なぜ情報発信するのかと言いますと、目的としては、この記念市史のファンを獲得したいというところが

目的であります。今回の市史作りでは、市民が制作に携わっているところを見える化して、「関心が反映されているのですよ」と伝えることで、シビックプライドを持てる市史にしたいというところです。

3年間のグランドデザインでの位置付けとしますと、3年間で、最初の年が「本の内容を吟味する1年」、次が「コンテンツ作りの1年」、次が「PRの1年」というふうに、ちょっと我々の方では位置付けているのですが、その都度つど市民への情報発信はして行って、関心を持ってもらいたいなというところです。

広報計画としては、ほぼ月間の「市史だより」ウェブ形式のものと、年2回の市史だより特別号を出すという計画で今走り出しています。市史だよりは皆さまの姿もウェブに載せさせていただいているのですが、川崎市の公式ウェブサイトから公文書館のページに行くと見られる場所に、ほぼ月間で載せております。今は2号まで出していて、現状まだ活動報告となっているのですが、今後は、スタッフ紹介とか、こういった取材のときの記録とか、ちょっと紙面ができてきたら一部をチラ見せして、「こんなふうになってきています」というような内容を盛り込んで発信していきたいなと思っています。文章については、大体、早川が書いていまして、この記事が公開された時には、公開されただけでは誰も気づかないので、「ここ発信しましたよ」ということを、川崎市のシティプロモーション推進室の公式Xで、URLのご案内をしているというところで、閲覧数も公文書館の方で記録を取っています。

これはウェブなので、見に行こうと思わないと見に行けないというところがあるので、もう少しテコ入れをするために、市史だより特別号というのを年2回刊行しようということで、今、その紙面案を2案作っていて、「どんなデザインにしようかな」、「何を載せようかな」というところを（検討）しています。

まず、この第1号を3月末ぐらいに出して、こちらはウェブ版だけではなくて、印刷もして市内の公共施設でレターラックとかに入った状態で、市民の方に手に取っていただきたいと思っています。こちらは、やっぱり最初の目的に踏まえると、市史づくりのファンを増やしたいということなので、まずは市民が読者であることを想定して、編集をしています。今日お聞きできたらと思うことが、「こういった情報発信をする媒体を作るぞ」となった時に、どんなのが「載っていると良いじゃないかしら」、こういうところに置いたり、こういうところで配ったりすると「こういう情報欲しい」と言ったり、「興味持ってくれる人に

届くと思いますよ」というところのアイデアをいただければと思います。お願いします。

事務局（片岡）

思った通りのままお伺いできればと思います。「絶対これ出さなきゃいけない」とか、「これが絶対確定しているもの」とかということではなくて、シンプルな「こういったものを出したら良いじゃないか」とか、なんか逆に言うと、「こんな媒体ってないですかね」とか、そういった決まり事ではなく、アイデアとしていただけますと、我々も考えられる幅が広がってきますので、本当にアイデアフラッシュでも構いませんので、いろんなご意見をいただけたら大変ありがたいです。

こちらは指名制ではなくて、挙手制となりますので、お願いします。

（竹内委員が挙手）

竹内委員

発信方法ですけど、確かに X とかもありますけど、小学生がターゲットだと考えると、小学校や中学校でプリントを配るので、プリントに QR コードを載せて、必ず保護者にも渡してもらい、ウェブサイトを見てもらって拡げてもらうのが一つと。あと小学校で GIGA 端末もあるので、授業で「市史だよりが出ました」などと 5 分ぐらいで良いので、そこからウェブを開いてもらうと小学生向けに発信できるんじゃないかと思います。

あと、シニア向けで言うと、結構シニアの人は LINE を使っているんですけど、町内会とか老人クラブのグループを使って、リンクを貼ってもらったものを LINE で皆さんに発信するみたいなことをすると、シニアの人も見てくれるんじゃないかなと思うので。

そういったことはちょっと考えてみても良いのかなと思いました。

事務局（浅井）

ありがとうございます。

事務局（片岡）

そのシニア向けの LINE 発信というのは、どちらかというとシニアの方々の、例えば団体でのオウンドメディアということでしょうか。

竹内委員

町内会とか老人クラブのグループがあるので、それを通じて「このリンクをみんなに回して」と依頼するということです。

事務局（片岡）

ありがとうございます。他に何かございますのでしょうか。

にしにし家委員

今の話で、元々人が集まっている団体へ直接に連絡ややり取りをして、すごく良いなと思ったのと、最近そういう公の団体でその情報を見た記憶があるなと思ったのが、公安が「オウム（真理教）」の情報を発信するというのがあったのですよ。結構刺激的なテーマで、その団体でしかできないものをやったら。結構、私は見たので。

今回の川崎市が、例えば、治安が悪いというイメージがあったとしたら、その治安の推移とかを、テーマ史があったら、その内容をそのままもう出しちゃうとか、テーマ史に関して、お試してみたいな感じですけど、全部を4回にまとめて出しますよとか（があるのでは）。それから、実際に載っている、こういう文章を作っているのが「この市史だよりです」みたいな感じのリンクの貼り方みたいなというのが。これはTwitter（编者注：現在の名称は「X」）とかやられているということなので、それも良いと思いますし、あと「note」（编者注：文章、写真、音声、動画などを投稿できるプラットフォーム）とかも、確かアカウントがあったと思うので、それも良いかなと思いました。

あと、その際のテーマとしては、治安とか、ラッパー文化とか、他の町との比較とか、あとはフロンターレとか、工場の風景とか、ファンがいっぱいいる（テーマ）とか、人が興味を持っているエンタメ的なまとめ、テーマ史とかの数回でまとめられる内容というのが良いかなと思います。

事務局（浅井）

ありがとうございます。

事務局（片岡）

ありがとうございます。ティザー配信という形になってくるかなと思うのですが、「オウム」を配信していたのは何の媒体ですか？

にしにし家委員

Twitterです。今は「X」ですけど。

事務局（片岡）

公安の「X」で、面白いですね。どこまでできるか（が分からないですが）、でも面白いですね。確かに比較やエンタメとか、日本人はランキングが大好きなん

で（興味をもってもらえると思います）。

事務局（浅井）

2 回目の時にもランキングとか面白いじゃないか（の話もあったですね）。

事務局（片岡）

ティザー的な記事で、「続きはウェブで」みたいじゃないですけど、なんかそういうものとか、やっぱりインプレッション（編集注：ウェブページに表示される掲載回数または露出回数）を取れる記事だと思います。

確かにこれは面白いですね。Xを活用して、さっきあったデアゴスティーニじゃないですけど、その切り売りして、見られるところを切って出していくみたいなどの部分にも繋がったりするのかなと思います。確かにそれは情報発信とコンテンツ作りというところを上手くハイブリットで考えていけると良いですね。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

高田委員

発信のタイミングが大事なと思うので。月刊であれば、12月になったら正月の川崎七福神めぐりの URL を送るとか。川崎大師の初詣に皆さん行くよねなど、事前に告知ができると良いと思いました。

事務局（浅井）

季節性を盛り込む。その即時性というか、その時どきのニュースに引っかけるということですね。

事務局（片岡）

おっしゃる通り、正直媒体は目新しいものってあまり出てこないのですよ。世の中にあるものを使うしかないの。よくいわれる「IMPAKT」、季節性だったりとか、日本初みたいだったりとか、そういった PR IMPAKT（編者注：コンテンツをニュース化してもらうための PR 視点をまとめたもの）というワードがあるのですが、なんかそこで言うと、今おっしゃったように、例えば大師で、初詣シーズンに、その大師の取り上げた記事を PR Times とかに出したりすることになると、それは一緒にトレンドワードとして、ワードとして伸びやすいとか。それはすごくあると思うので、媒体だけを使うわけじゃなくて、タイミングもしっかり「何のコンテンツにミックスして良いのか」とかもしっかりと考えていきたいなと思います。ありがとうございます。

（嶋田委員が挙手）

嶋田委員

何があってという話ではないのですけども。今、僕、そのミュージカルのチラシを行政のいろんな部署に頼んでチラシを置かせてもらって、情報発信していただいているのですけども、川崎市、やっぱり結構縦割りじゃないですか。

我々のイベント自体は、幸区で市民館が担当ですね。あとは企画課とかなんですけども。やっぱりそうすると、その担当のところでしか配れない。図書館だとか、市民館といったところでしか配れなくて、せいぜい他の区の市民館とか図書館に置いてもらうぐらいなのですね。

市自体でいくと、もっといろんな部署があって、今も僕、こども未来局に行ってきた。今度、今週、川崎市青少年フェスティバルというイベントが等々力アリーナにあるのですけども、「そこで配ってください」と頼んできたりとか、教育委員会に行ってみたりとか、経済労働局さんで、うちの地元「新川崎・創造のもり」というところがあって、新興企業とかベンチャーの研究所があるのですね。そこのところに「置かせてください」とか、「協賛をお願いします」みたいな、そういう部署ごとをお願いして廻ったりしています。

なので、それぞれの部署にメディアとか、ツテがあるのですけども、それをやっぱり、統括する場所はあるかないか分からないのですけども、自分のエリアがあって、学校に例えば川崎市の小中学校の生徒で10万人いるのですよ。チラシを配ることにすると10万枚配るので、それはインパクトがあるのですけど、今ちょっとチラシを配るに関して、学校が難色を示したりとかがあったりですね。教育委員会のお墨付きとか、どっかのお墨付きみたいなのがあったりするんですけども、それでも「ちょっと…」みたいなところもあったりするので、多分、民間ではなくて行政内、川崎市の中での取り組みとして、縦割りのやつをどうにか横串さしてみたいな働きが必要だろうなというところで、それを生かせれば、本当にものすごい発信はできるのだと思います。

事務局（浅井）

本当、そのチラシの配り先はお聞きしたかったのですが、ありがとうございます。

嶋田委員

でも、僕が回ったところより、本当はもっとたくさんあると思うのですね。

事務局（堀切）

そうですね。五十か所ぐらいに配る便はありまして。ただ、それは、学校は入ってなかったりします。おっしゃる通り全部を網羅しているものはなかなかない

と思います。

事務局（片岡）

学校の配架便は、去年の11月が最終の配架便で終わっちゃったのですよ。それ以降は基本的にデジタル。先ほどおっしゃったGIGA端末になったりするのですが、やっぱりなかなかGIGA端末を渡されてもなかなか見ないって子が多くて。そこで言うと、さっきタイミングというのもあったのですが、やっぱりターゲットは、先ほど市長もおっしゃったのですが、小学校1年生、中学生とか、多分見る人が違うという時に、適切なタイミングで適切なコンテンツを適切な人にちゃんと提供するというところを（考えないといけないです）。

ただチラシ1枚をバーっていっぱい撒いたら良ってもものじゃないなので。まさに今回そうだなと思います。今の縦割りの部分もしっかりと、横串するかとかも考えていきつつ、そこは配布する対象とタイミングも合わせて色々考えていきたいなと思います。ありがとうございます。

（中村委員が挙手）

中村委員

このビジュアルも見たっていう感じですよ。この情報発信が、この本を作っている広告なのか、それともこのタイトルになっている通り、私たちも関わっているとおり、みんなで本当に作っていく過程を、これから作っていくのをワクワクするための情報発信なのかをちょっと確認したいのと、これは最後のやつを見ると、この後、来年とか、市民記者をこれから募ったりして、参加型もあるのだということも思ったのです。

多分これを見ると他人事で、そんなに興味が湧かないのかなと思います。自分ごとにしないと、結構（難しいので）。自分の意見がちょっとでも反映されたものに最後まで気になるというか、（今のほうは）完結しているチラシなので、初回はそうなのかなと思うのですが、それこそさっきのランキングもそうですが、「良かったら、好きな食べ物をここにアンケートしてください」みたいな、ポチって（投票）できるようなものとか、参加型にできるようなチラシ構成になっていたりすると面白いのかなと思います。結果をサイトに見に行ったら、「あなたの結果、ここに今反映されました」みたいな。よくテレビだと「（選択肢の）ABCのどれ？」みたいな（問いに）、「私、Bを選んだのに、B少な！」みたいな、そういう参加型のもの（が良いかなと思いました）。

私たちのコンテンツはだいぶ出てきているのですが。これは多分表に出せな

いけど、なんか匂わせるようなアンケートが取れても面白いのかなと思いました。

なので、それを置く場所としたら、たくさんの普通の日常の人たちが行く商業施設の入り口とかに置いていても、すごく面白いのかなとか。

先の小学生っていうと、これを小学校に配られて、子どもたちワクワクはしないかなとか思うのですよ。大人も、子どもたちがチラシを持ってきて、「だから？どう動く？」みたいな（反応しかないと思います）。

例えばよくある、私たち、子どもがいるあれだったら分かるのですが、子どもは「川崎フロンターレ Now」という、両面の新聞形式（のチラシ）を持って帰るのですが、なんかすごく楽しいのですよ。「今日これを見ていて、楽しい」みたいな、それは何が楽しいかというと、選手のことを分かったり、フロンターレの中が分かったり、ちょっとイラストがあったりして、「あ、読み物が楽しい」（という感じ）があると。これ（今のチラシ）は、報告になっちゃっているので、報告はそんなに読みたいですか。せっかくだったら手に取りたくなるような声のかけ方とか、みんなで作るだったら、「あなたも参加できます」みたいな。

これから3年もやるので、自分ごとになるような。「あなたの住んでいるまちが川崎ですよ」みたいなのを、これから選んでもらえるまちになるかもしれないのですが。せっかく情報発信で出せる量もあるのですが、なんか自分事になるような、問い掛けもあるようなもの（にしていくと良いと思います）。

小学校が難しくても、日常のところに溢れていると「そういうものが始まったのだ」というのが分かって。「もしかしたら、どこかで、自分も参加できるかもしれない」とか、「関われるのかもしれない」と思うと、ちょっと関心が寄るのかな。なんか、（委員の）私たちが特別のじゃなくて、私たちはとりあえず一旦道筋を立てているけど、「あなたたちも同じ川崎市民と一緒に作っていききたいのですよ」みたいなことがあると良いのかなと思います。

で、SNSとかも良いし、ちょっと若いターゲットにするなら、ママとか親子にするのはXよりInstagramもあったほうが良いのかな。あと、各区にインフルエンサーがいるので、多摩区はにしにし家さんがいます。にしにし家さんは今、食の発信だけど、ソーリス（ソーシャルリスニング）を使ってくれるはずだから。各区のインフルエンサーとかもやると、結構伸びてくれるかなと思います。以上です。

事務局（浅井）

ちなみに、各区のインフルエンサーにお願いするときには直でお願いするよう
な感じですか。

にしにし家委員

Instagram なら DM とかで大丈夫かと思います。

中村委員

（公式的に）任命みたいなことをやると、ちょっと頑張ろうかなって思いま
す。

（反町委員が挙手）

反町委員

私、今の中村さんの意見にはかなり最初から最後まで全面的に賛成で。まず自
分事として、関わりがあるのを思ってくれないと、最初から始まらないと思っ
て、これ（市史だより）が手元まで渡ったとしても、本当に見てもらうのは超
大変だと思うので、余程こういうものに、川崎のことに興味関心が高くて、どん
どんチャージしようという人じゃないと、なかなか難しいと思います。

なんでぱっと見で自分が何か関係があるかは、自分の好きなものを書いてある
みたいな感じで、まずちょっと一旦読んでもらう（ための）取っ付きやすさみた
いなのが大事だと思います。

今、インフルエンサーの話が出たのですが、絶対そういう人は必要で、影響
力のお持ちの方、もちろん川崎に対しての思いとか実績がある方、まさにインフ
ルエンサーの方とか、その発信力のある方で、インフルエンサー以外で言うと、
例えば、ご当地アイドルみたいな方とか、ずっと川崎を背負って活動しているア
ーティストの方とか、音楽だけじゃなくて、そういう方とかを味方につけて、同
じ方向に向いて「みんなで一緒に盛り上げようよ」というのをやっていくのが大
事だと思います。

あと一個、情報発信の主になっちゃうのですが、私が本業、仕事柄、そうい
うとりあえずリアルな方の話、SNS とかじゃなく、SNS も超大事と思いますけ
ど、リアルのほうで、結構アウトプットの場を持っているんです。活用できそう
な機会があります。私の強みは、高齢者向けのものもいっぱいあるんです。子ど
も向けとか、先の話で。学校にリアルの紙が配れなくなっちゃって、周りに困っ
ている方いっぱいいるのですよ。それで、集客を頼っていた人がすごくいて、で
もそれダメになっちゃって、本当に困っている人がいるのですよ。それに変わる

ためには、やっぱり学校で配れなくなったから、それに近いような環境で、子どもたちとかも大人たちに PR できる環境が必要だと思って、それをずっと考えていて、少なからずそれを持っているので、ご協力させていただきたいと思います。以上です。

事務局（浅井）

ぜひそこを助けてください。

事務局（片岡）

なんか結構紐づいているなど。おうかがいしていて思ったのは、結局、多分インフルエンサーというのは色々属性がいて、いわゆるパワー系のインフルエンサーもいれば、どちらかという、最近、インフルエンサーに加えてマイクロインフルエンサー、大体登録者数が1万人から3万人以下の方々をしっかりと学校と一緒にやっていくみたいなケースが多いんですけど。なんかそうなった時に、やっぱりコンテンツなんですよ。多分これ、さっき言っていた、「どういうコンテンツがあると引きがあるのか」みたいなことをちゃんと整理していかないといけないのかなと思ったりしております。

中村さんのおっしゃったことが刺さるなと思っていて、チラシをパッと見た時に、自分が参加したいとか、これに興味を（持ってもらうような）、そこに置いているチラシを見て、ちょっとやってみようと思わせているかということ、そこはもう再考が必要なのかなと思うので。それはコンテンツなのか、見せ方なのか、しっかり考えて、理想は鉄道のスタンプラリーみたいな。貼っているだけで人が集まるみたいな、何のメリットもないのに、回ってくる。でも、そこ（鉄道のスタンプラリー）はやっぱり楽しみがある。知ることとか、歴史を知っていくということがあると思うので、そこら辺をしっかりと考えた上で、コンテンツの土台を作って、インフルエンサー活用とか、反町さんのコンテンツを使ったりするとか、そういったことをやっていきたいと思います。中村様、ありがとうございます。すごく勉強になったというか、目を覚まさせられました。ありがとうございます。他はいかがでしょうか。

羽賀委員

私も Instagram が良いなと思いました。やっぱ X は結構流れちゃうので、あまり見ないです。Instagram には動画とかも色々投稿できて、かつ、川崎市のアカウントというより、市史専用のアカウントがあると、そこにアーカイブのように格納されていくので、気になった時にそのアカウントを見れば全部情報が見える

みたいなのが良いなと思いました。

あと、市史だより自体は、本に繋がっていく仕掛けみたいな、デザインの仕掛けみたいながあると、もう1回見たいなと思っていて。投票とかもそうですが、あとは、なんか「3年間のうち、今はここです」みたいなのが分かるとか、「次回はこういうことをやります」の情報とか、あとは、冊子のチラ見せも少しあると思うんですけど。市史だよりを読んでいて、「これが本にこうなったんだ」みたいな、それがデザインで繋がっているとより面白いなと思いました。

事務局 (片岡)

市史は完成したらもう動かさないじゃないですか。川崎市にはめちゃくちゃ良い Instagram のアカウントがあったりして、乱立しているというのはあれですけど、今はシティプロモーション推進室のアカウントは1番フォロワー数が多いです。

例えばこの100周年を機に成長し続けるとか。Instagram がだんだんアーカイブとして残って行って、「1年後はこうだけど、こうだった」とか。100年後まで Instagram があるか知らないですけど、100年後に見返したら、めちゃくちゃ「100年前はこんなだった」みたいなことが、成長し続ける市史（にできればと思います）。それがデジタルの良さと思ったりもするので、そういったことも工夫して見ていただけたら、お願いいたします。

あと、UGC（编者注：ユーザー生成コンテンツ）投稿じゃないですけど、ユーザーがこれに触発されて、一緒に投稿してみるとか、そういったところをウェブとかで、そのアーカイブで集めて行って、気づいたらいろんな人が歴史についてツイートしているというのが集まってきたりするの「みんなで作る市史」みたいなのもあったりすると、面白いかなと思ったりするので。勝手に広げていますが、そういった皆さまのご意見をまた今後いただけると大変ありがたいと思います。ありがとうございます。他、いかがでしょうか。

落合委員

今チラ見せの話が出たのですが、私も同じような感じで、ここら辺の1つ項目を出すという感じですね。それで、他の部分に宣伝みたいなのも良いと思うのですが、それを書いて出して、それで反応を知るというのは大事で。そこで我々は「これが面白い」とか思っていたが、実は全然つまらないとか。「こうやったら良いじゃないか」みたいな感じで、そこで書き直して、ちゃんとした本編でこう書くというののもあっても良いような気がするので、中身のことを具体的に本当

に書いても、別にそれはそれで種明かしというわけではなくて、どんどんこう言っちゃっても良いのかなとか内心で思っています。

事務局（浅井）

ケチらないのは大事なことだと思っております。

事務局（片岡）

目安箱みたいな感じですね。

（嶋田委員が挙手）

嶋田委員

皆さんの話に乗っかっていく感じですけど、紙の「市史だより」も皆さんから出ているあれですけど、いわゆる Call to Action（编者注：行動喚起の意味）、「こういうことやってみませんか」とか、募集とかというコーナーを毎回付けていくと良いのかなと思いました。

インフルエンサーの方とかにハッシュタグで何か集めてもらうとか。昔の写真募集でも良いですし、そういう働きかけとか、「参加できるよ」という、参加できる感をアピールしていくのは大切かなと思いました。それから、反町さんからもリアルな場が出たのですけども、「活動はリアルで触れられる場所がある」とか、そういうのがあっても良いのかなと思いました。（ワークショップの）グラレコは実際に見てみたいし、この制作期間、3年間、あと2年ちょっとと思うのですけども、その間ずっとどこかで活動報告で、リアルであっても良いのかなともちょっと思いました。

望月委員

皆さん方の意見、ほとんどそうだなと思います中で一つだけ、タイトルの「かわさき市史だより」というのが固すぎるのではないかなと思いました。

通常、学術的な自治体史ではこういう市史だよりを出しています。それは研究余録みたいな形で、いわゆるミニ論文みたいなのが大体「市史だより」に載っているのが一般的です。

我々からすると「市史だより」というのはそういうイメージを持つてしまうのですけども。今ここで「市史だより」かなって。もう少し柔らかい、誰にでもという意味では、「市史だより」というより、もう少し何か今風の、もっと手に取りやすい、目につくタイトルのほうが良いのかなと、今皆さん方の話を聞きながら、改めてタイトルも少し検討したほうが良いのかという気がしました。

事務局（片岡）

今おっしゃっていただいた「市史だより」とは、通常は割と硬いものが多いということですが、私は「市史だより」がどんなものなのか、あまりイメージが湧かなくて、分からないですけど、一般的にどんな内容が配信されていますか。

望月委員

落合さんはよく分かっていると思うんですけど、編集委員の人たちが執筆する中で新しく研究成果として見つけたことだとか、というイメージです。

事務局（浅井）

ただ、それはあまり一般の方の目には触れないのですね。

望月委員

そうですね。我々から見ているとそういう硬いイメージなので。ただ、今ずっと話を聞いていて、Instagram 云々という話も含めていくと、今この 21 世紀に「市史だより」（という名称でよいかどうか）かと思います。

もう少しなにかあるじゃないかなという気になりました。

事務局（片岡）

なるほど。それは現実的に変えられるものですか。

事務局（浅井）

ウェブサイトはまだ変更ができます。

（鈴木（ゆ）委員が挙手）

鈴木（ひ）委員

いかに飛び火させるかというのは大事だなと思っていて、その正攻法で、今あるルートに乗っていくのは有りだと思うんですけど、バーツと広がっていくのは結構大事かなと思います。

ダジャレは結構拡散力が凄くて、私が知っている事例を紹介すると、例えば、「古河機械金属」という社名をご存知でしょうか。その会社が電車の窓のところに「古河気合筋肉」って書いてあるのです。それを見かけた人が面白がって、勝手に広げてくれるんです。それで今それを見た学生がなんか面白そうな会社なので、受けていましたとか、そういう人が来たりしたという話があったりします。

それから、広島の実市が「呉氏（くれし）」というキャラクターがいるのですよ。YouTube で「呉氏」と検索してみると、TRF の「CRAZY GONNA CRAZY」という曲があって、あれに合わせて「呉—市—GONNA 呉—市—」とその呉氏が踊っていて、めちゃめちゃ面白くて、すごいビューがあったりしま

す。

さらに、富士宮焼きそばって全国的にも有名なのですが、ダジャレで広がったってことを公言していて、例えば焼きそばの出張サービスを「ミッション麺ポッシブル (MISSION MEN POSSIBLE)」とか、「小倉の焼きうどんと、どっちがうまいか」というので、打ち出したのが「天下分け麺の戦い」で、それだけでメディアが勝手に取り上げて広げてくれるのですよ。お金をかけずにすごく広がるので、ダジャレは拡散力があります。ただ、今この状況で何ができるかはよく分かりません。

事務局 (片岡)

すごく期待していました。

事務局 (浅井)

公文書館さんの脱皮具合がですね。一応、市史だよりも、ちょっと攻めてみようかという案もあったんですけど。

相原館長

北海道に鷹栖という町がありまして、町議会の広報を駅の中吊り広告みたいに写した形で、面白く、町民に対して、知ってもらおうということやっていたのですね。面白いということで話したんですけど。なかなか役所的にそこまで思い切れるかどうかは、ちょっと難しいところはあったんですけど。今お話を聞いて、目から鱗が落ちたかもしれないです

事務局 (片岡)

それはぜひ考えてもらいたいですね。

川崎も 100 周年のポスターいっぱい貼ったじゃないですか。あの中に 1 個だけ、実は、ダジャレというわけじゃないですが、ちょっとモジったやつがありまして。「カオス」というワードです。10 種類ぐらい作っていたんですけど、その 1 個の中に、夜の街、夜市を、「カオスを、醸す (かもす)」というテキストがあったのです。誰もダジャレと思ってないんですけど、やっぱり川崎って「カオス」って言い切って良いのか、みたいなどころとかチャレンジであったんですけど。なんかそういった遊びをちょっとずつやっていくというところが、どこでバズる (编者注: SNS などを通じて短期間で多数シェアされて大きな話題となり、大勢の注目を集めている状態) のが分からないので。ちょっとぜひ宿題を (考えてさせていただきます)。

鈴木（ひ）委員

「飛躍祭」（100 祭）は狙ってやってないですか。

事務局（片岡）

（そうですね）「飛躍祭」は「100 祭」からですね。

他はいかがでしょうか。

阿久津委員

今の聞いていてちょっと思ったのが、中学生とか、中学生だけじゃないと思うのですが、ラップバトルがすごい人気で、ダジャレを含めつつ韻を踏むみたいな、川崎市をテーマにした動画とかを流してもちょっと面白いのかなとか。ただ、品がなくなるというのはあれですけど、上品な感じで、品よくラップしたら面白いと思います。

あと、その巻き込んでいくというところで、昔の写真募集はすごく素敵だなと思って、皆さん持っている方とか、見せたいとすごく思うので、それはぜひやっていただいたら良いんじゃないかなと。このチラシにもそういう風にそれを載せると皆さんアクセスしやすいですし。

あとは、そこはちょっと大人の方に向けだと思うのですが、子ども向けには、中村さんがおっしゃっていたキャラクターというところで、子どもたちからキャラクターを募集する、もしくは、もしキャラクターが作れるのであれば、キャラクターの名前を募集するというふうに巻き込み、よくある感じではありますけれども、よくあるということは、やっぱりそれだけ皆さんがアクセスして、興味を持つということなので、そういうのがあると面白いのかなと。

ちょっとそれをまとめていくのは大変なのかなと思いますけど。できるかできないかを別として、ちょっと私はそれが良いかなというふうに思いました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。アイスバケツチャレンジみたいな、ラップバトル、歴史ラップバトルみたいなのが次にあると面白いですね。

阿久津委員

勝手になんか若者がやったりとかして、拡げてくれても面白いですね。

事務局（片岡）

（ラップバトルの）1 発目は阿久津さんでどうですか。とんでもなく話題になります。

でも、ちょっと遊びを入れていきたいですよ。せっかくこっちはだんだんラ

フになっていきたい中でも、硬いものがあるので。やっぱり発信も若干遊びがあるということは大事なと思うので、ぜひそういったところも含めてしっかりと考えていきたいかなと思っております。

(次第一4) 次回への宿題提示

(次第一5) 総括・次回案内

事務局 (片岡)

すいません、お時間も良い時間になってまいりましたので、そうしましたら、締めも含めて、次回のお話しをお願いいたします。

事務局 (浅井)

本日第3回でございましたが、第4回は4月の17日から25日あたりを目安で、また夜のお時間帯でできればと考えております。会場はまた武蔵小杉かなと思いますが、目途が立ち次第ご予約をお伺いいたしますので、よろしく願いいたします。

第4回ですけれども、一応、計画でいきますと、「取材先や街歩きスポットについて話しましょう」という設定にしております。今、構成案の初版が出ましたけれども、この中身をどんどん詰めていくということで「ここに取材に行くべし」というところを皆さまからアイデアをいただきたいと思っております。

第2回の時にも予告出しをしておりましたように、この「川崎市の、わた史」のところに良さそうな方を、人物+テーマで、人物は現存の方でお願いします。イタコは無理なので。

「この方にこういうテーマでお話を聞いたら良いじゃないか」というのを心づもりいただきまして、私のほうがまた会議を先駆けてメールでお伺いしますので。その時、そのメールの返信で「この人とこんなテーマが良いと思う」というのをください。そうしましたら、第4回の際の資料として、ちょっと下調べもしたりして、皆さんに情報が共有できるようにしていきたいと思っておりますので。ご協力をお願いいたします。以上です。

事務局 (片岡)

ありがとうございます。そうしましたら、今回、以上を持ちまして、第3回の懇談会を終了させていただきます。また今後もしっかりとブラッシュアップして頑張っていきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

以上